

人間の発達と教育

—子どもの発達特性と学校教育に関わって—

相良 麻里

(平成 15 年 10 月 2 日受理)

Human Development and Education

—Concerning Children's Developmental Characteristics and School Education at Present—

SAGARA, Mari

(Received on October 2, 2003)

キーワード：子どもの発達特性，道徳性の発達，自己実現

Key words : bildstock, children's developmental characteristics, development of morality, self-actualization

はじめに

現代の社会は、高度情報化社会・国際化・少子化社会などと呼ばれ、複雑な文化・社会的環境のもとに多極化した価値観に覆われている。それに伴い多方面にわたる様々な諸問題・病理現象が多発している。そしてこの状況はますます複雑さを増し、重要且つ大きな局面を迎えている。この状況、社会を生き抜く望ましい人間的発達のために重要である適切な発達課題の履行にも多大な影響を与えている。

現代の子どもたちは現実的な生活体験や社会体験の不足、人間関係や社会的連帯感の希薄化、社会化の未成熟により、道徳性が低下しているといわれている。我が国の家庭教育力の低下、経済的豊かさ第一の価値観、失敗の許されない競争社会など現在の社会は子供をとりまく環境も劣化している。そのため子どもが抱える問題は多種多様であり、それらは問題行動として次々と表面化してきている。

本来、学校教育は知性・心理・社会・身体における発達、いわゆる人間の全体の発達を考慮にいれ、体系的に構築された教育内容でなければならない。しかしながら現代階においては知識のみに価値が見いだされ子どもの成長・発達に不可欠な様々な体験・経験の学習という観

点は置き去りにされている。この現象を克服するためには子どもの発達特性を今一度正しく理解し学校教育における望ましいパーソナリティ形成や自己実現化への教育的課題を再検討する必要がある。

本稿では人間が成長・発達するプロセスの中でも児童期を中心に取り上げ子供の発達特性と達成すべき発達課題、望ましいパーソナリティ形成に必要な道徳性の獲得を学校教育と関わりあいを持たせながら再検討し、自己実現へむけての今日的な教育的課題について論じた。

児童期の発達課題の特性と基礎的課題

日本子ども資料年鑑(2002)によると平成11年度、小学生がよくやる遊びの男子の1位がテレビゲーム、女子の1位が絵を描くであった¹⁾。これは1年から6年まで共通の結果である。また小学生の休日の過ごし方をみても友達と集まって遊ぶと回答した子どもは男子23パーセント女子17.8パーセント(各学年平均)と極めて低い数字となっている。この数字が意味するところの背後には何が潜んでいるのだろうか。人間はこの世に生をうけ、人間的・社会的・文化的環境のもと適切な学習・教育の過程を経て、幼児期、児童期、青年期といった発達の段階を経、幼少期、児童期、青年期といった発達の段階を経、そして心身ともに調和のとれたおとなへと成長していく。その成長は複雑な様相をおび、それぞれの発達段階に促した

教育・学習が必要である。そして、人間には健全に発達していくためにそれぞれの発達段階で達成しなければならない課題がある。それは発達課題といわれているものである。この発達課題は時間の経過とともに自然に達成されるものではない。すなわち発達課題に応じた社会的・心理的・知的・文化的な体験・経験の積み重ねによって達成されゆくものである。このような生きた体験・経験の教育・学習のひとつひとつが重要であり、人間の成長発達には不可欠であり、その後の人格の形成に大きな影響を与えるものである。

発達課題の内容について最も早く問題提起的、系統的に論じているハヴィーガースト(R. J. Havighurst)によれば児童期はおよそ6歳から12歳頃までを指している。この時期は身体的にも心理的にも大きく発達する時期であり、その発達は大きく2つに分けることができる。児童期前期では、幼児期的な特徴が多くみられるが10歳頃になるとその特徴も徐々に消滅し安定した行動がみられるようになる。知的発達がめざましい時期であり自己中心性から脱し、客観的な概念の形成が可能になり論理的思考ができるようになる。

児童期後期になると青年期にみられる身体的特徴が現われるが、精神的には児童期の特徴をまだ残している。この時期は心身の安定した発達が進行し様々な能力や特性が形成されてゆく重要な時期である。

この大切な児童期は学童期と重なっている。そのため学校生活における学習活動や友人との集団活動が発達課題に達成の仕方に重要なウェイトをしめてくるのである。

発達課題の内容についてハヴィーガーストは、児童期の基礎的な課題として具体的に9つの項目を挙げている。

1. 普通のゲーム(ボール遊び、水泳など)に必要な身体的技能の学習
2. 成長する生活体としての自己に対する健全な態度の育成
3. 同年齢の友達と仲良くすることの学習
4. 男子または女子としての正しい役割の学習
5. 読み、書き、計算の基礎的な技能を発達させること
6. 日常生活に必要な概念を発達させること
7. 良心、道徳性、価値の尺度を発達させること。
8. 人格の独立性を発達させること
(自主的な人間形成)
9. 社会的集団並びに諸機関に対する態度を発達させる

こと²⁾

ここに挙げられた児童期の課題は学校生活と密接に結びついている。学校での種々の教育活動を基礎とし、その活動の広がりから児童期の発達課題が履行され達成することが望ましい。そしてこれらの発達は大きく身体的発達、知的発達、社会的発達に分けて考えることができる。

この3つの身体的発達、知的発達、社会的発達の課題を学校生活に組み合わせて考えてみたい。身体的発達は児童期の基礎的な課題の1と2に相当する。学校生活において健康で安全な生活指導をうけることにより、さまざまな障害を乗り越えられるような、たくましい身体と忍耐力を養い達成することができる。知的発達は5にあたり学習面において授業を通じて基礎的な知識・技能を修得することでこれも達成することができる。社会的発達は上述の3, 4, 6, 7, 8, 9に相当し学校生活における様々な学習活動、集団活動・集団行動を通して生きた体験・経験により達成することのできる課題である。学級集団の中で培われていく友人関係は子どもの社会化と密接な関係を持つ。同じ学級に所属する個々が同じ体験・経験をすることにより仲間意識が芽生え、競争し、共同作業をすることによって「協調性」「自制心」「責任感」などの社会性を身につけていく。他人との競争も自己を客観視する上では必要なことであり、この時期の競争は協力と背中合わせのものである。そして子どもは忍耐力や自制心を学んでいくのである。

このように、児童期は、基本的な生活習慣、学習習慣、社会性を身に付け、学校での教育・学習活動をとおして生きていくために必要な知識・技能の基礎を学び、将来自己実現へ向けての人間関係や価値意識の土台を形成することが大切なのである。

堀尾は「子ども達が学び取る教育内容は学問・文化の成果であり、学びの活動は、その成果を我が身の中で、その生活経験とのつながりから再創造する過程でもある。」と述べている³⁾。すなわち、子ども達にとって学校は成長・発達に欠かせない学びの原点であり人間的な思いやりと愛情や生きる力を備えたパーソナリティ形成という意味・役割において大きな位置を占めているのである。

上述のように児童期における基礎的な課題は学校教育に重要な視点を投げかけている。子どもの発達特性と基礎的な課題を見直し理解を深めることにより、学校教育にお

ける問題点が浮き彫りになってくるのである。

児童期における道徳性の発達

人間が人格形成していく上で最も重要な要素のひとつは道徳性である。人間は社会的存在である。社会生活において自己と他者の個人的・集団的な相互関係の中で生きている。道徳は人間が社会に関わる内面的価値としての規範である。そして道徳の行為の質—内面性—その性格が道徳性である。

児童期はこのような道徳性を形成する上で非常に重要な時期であり道徳性の発達の履行には大人は細心の注意を払わなくてはならない。物事の善悪を判断し、その判断に基づき行動する能力を身につける過程は単純なものではなく、この能力を適切に形成するためには児童期の道徳性の発達の過程について正しく理解することが大切である。

では、子どもはどのように発達の過程を経て道徳性を発達させていくのであろうか。

ピアジェ (Piaget, J) は道徳性を段階的に発達するものとして分析し「他律から自律へ」と分析している。そして、道徳性の発達を単にひとりひとりの子どもを取り巻く社会や環境に含まれている道徳的規範を内面化し、その規範によってつくられている環境に適応していく過程ではなく、子どもが自ら認知的に構成していく過程であると述べている。児童期の前半における道徳性の発達には、他者の行動の模倣という形で芽生える。身近な大人、例えば親や教師の言動や行動が手本であり、それが子供の行動や行為の基準となる。そして、それは家庭や学校での生活を通じて体験・経験することにより身に付いていくものである。例えば知識として獲得したからといって行動として実践されるとは限られるものではない。親や教師から賞賛される行動を「良いこと」、叱責される行動を「悪いこと」と認識させ、常に見守り繰り返し指導していくことに留意する必要がある。

児童期が進むと、子供は道徳を内在化し、ものごとの善悪の判断を、知性に基づき自分の意志によって行動することができるようになってくる。それは自我の芽生えにより自立への欲求が高まり、行動の基準を内的に求めるようになってくるからである。そして結果論的判断(悪い結果だから悪い)から動機論的判断(わざとだから悪い)また他律的道徳性(叱られないように)から自律的道徳性(守るべきことだから)へと移行していくので

ある。子どもが不注意により起こした大きな損害と故意に起こした小さな損害を比較したとき、児童期の初期の段階では子どもたちの意識は損害の大きさに着目し判断しがちだが道徳性が発達してくるとその行為の動機に意識が向かってくるのである⁴⁾。

また、コールバーグ (Kohlberg, L) は上述のピアジェの分析を道徳性の発達の問題に適用し認知発達論的な道徳判断として次のように定式化している⁵⁾。

水準1	無道徳レベル
段階1	罰や制裁を回避し、権威に対して盲目的に服従する志向
段階2	報酬や利益を求める個人的欲求の満足、平等な交換への志向
水準2	慣習的道徳性のレベル
段階3	よい子志向、よい人間関係への志向
段階4	法と社会的秩序維持、集団利益への志向
水準3	自律的道徳性のレベル
段階5	社会契約的な法律・基準、個人の権利志向
段階6	良心または普遍的な倫理原則への志向

彼は個人の行為の背後に隠れているより深い認知的な構造に着目し道徳性における道徳判断についての発達段階の形式を上記のように見いだした。そして人間の道徳性は自律的・原則的水準の道徳性に向かい段階1から段階6に向かって順次発達していく性質をもっており、最終的には最高水準の段階6を目指すものである。しかしながら、人間のすべてが達成するわけではない。段階1から段階6まで発達課題を段階的に達成することで道徳性を身に付けていくのであるが、大人になれば誰もが最高水準の段階6に到達できるものではなく、段階の半ばで大人になり真の意味での道徳性を獲得できないまま大人になることもありうる。

例えば日本子ども資料年鑑2002によると小中学生が違反行動をしてはいけない理由を表1のように挙げている。

回答の中で最も多い理由は「家族が悲しむから」である。これは小学生・中学生に共通している。中学生になるとピアジェの発達段階の視点から考えると他律的道徳から自律的道徳へ移行がなされている時期なのであるが、「家族が悲しむから」という他律的道徳判断が以前高い数値であることから考えると道徳性の発達に遅れを見て

とることができる。

表1 小・中学生の違反行動をしてはいけない理由(平成11年)
(%)

区 分	小学生 男 子	小学生 女 子	中学生 男 子	中学生 女 子
人数(人)	559	516	578	590
人の迷惑になるから	60.6	62.2	59.0	53.6
家族が悲しむことになるから	66.4	71.1	62.1	62.5
人として恥ずかしいことだから	43.8	49.4	47.9	51.4
法律で禁止されているから	56.9	49.2	58.1	48.1
自分を大切にしたいから	56.7	57.4	65.6	76.6
この中にはない	0.4	—	0.9	0.2
わからない	4.1	5.6	0.9	1.2

価値観が多様化した今日の社会において、子どもたちが健やかに成長を遂げ発達していくために学校教育はその教育機能を十分に発揮し、その混乱からの脱却を図るために道德性の新たな問い直しが必要とされる。その具体的な指導方法を検討するにあたり、道德性の発達過程を見直し、子どもたちが様々な体験を通して発達課題を適時に達成し積み重ねていくことへの援助の方法を確立することが重要だと思われる。そして道德性の意味、価値などを今一度吟味し、子どもが共感しあう関係を構築し健全な自尊感情を、子どもに内面化させることが望まれているのである。

人間的発達と自己実現

児童期の発達課題は時間の経過とともに自然に達成されるものではない。発達段階に応じた体験・経験を日々の生活のなかで積み重ねていくことにより達成されてゆく。

エリクソン(E. H. Erikson)は人間の発達を自我の発展に焦点をあて捉えている。それによると彼は、リビドー(libido)の存在を認め、リビドーの高まりが各器官に順次移行し自我の発達と内的に関連している点、および自我の発達には人間関係や・社会・文化的環境が欠かせない点に着目し自我の発達における発達段階を設定した。

そして人間のライフサイクルを8つの段階に区分し、各段階において解決しなければならぬ固有の課題を乗り越えることができなければ次の課題に取り組むことができないと主張する⁶⁾。その解決は前段階において準備され、その後の段階において解決がなされる。

エリクソンの発達段階を日本の学童期と照らし合わせてみると潜在期に該当し勤労性と劣等感との葛藤の段階である。この勤労性と劣等感が両極で作用することによりいわゆるコンピテンス(competence)の徳が生まれる。この時期に勤労性を身につけ成功する子どもは自分自身を有能と感ずるようになるが子ども社会的なコンピテンスや能力の習得に失敗した結果劣等感情が育つ場合がある。劣等感を強めてしまった子どもはその後様々なことへの興味を失い他人との接触をさけるようになってしまう。すなわち、劣等感にうちひしがれずそれを乗り越え勤労性や達成能力を獲得することで潜在期の危機を脱することができるのである。

今、子どもは人間的に生きる力を失い社会と自己に背をむけようとしている。子どもが積極的に生きる力を見だし歩み始めるためには、人間的素質や能力の再発見、本質的な知性と理性の獲得、適切な道德性の形成、そして自己実現(Self-actualization)の達成をはかってゆくことが必要不可欠である。

マズロー(Maslow)は自己実現とは「自己の素質や才能、能力、可能性の使用と開発であり、自己の資質を十分に発揮し、なし得る最大限のことをすることである。静止せず、到達しきっておらず、常により良い成熟に向かって動いている。その実現化のプロセスは、真の自己の発展あるいは発見、および実在している。あるいは潜在している能力の絶えざる発達を意味している。」⁷⁾とし自己実現化しつつある人間はすべて例外なく、自分の体外にある目標を立て、その何者かに従事、専心し、つまらない目標でなく、本質的に・究極的な価値の追求に専念していると述べている。自己実現を達成しつつある人間はその満ち足りたエネルギーを仕事や生産活動に向け新たに何かを創造しようとするのである。この場合の創造性とは、柔軟性、自発性、開放性、謙遜性に関わっており、周囲の目に隠ることなく進んで難関に立ち向かうことのできる人間性のことを示唆している。

では自己実現している人間の客観的特徴とはいかなるものであろうか。

それらはまず現実を有効に認知し現実と快適な関係を

保持していること、決して自己の感情や見解におぼれたりせず、正確に物事を判断し偽物やごまかしを見抜く力にすぐれていること、常に不安、恐れ、期待、誤った楽天主義や悲観主義に乱されることのない認識力をもちあわせ、決断力に富み、より適切な判断力を有していること、独りよがりな態度、認識ではなく、他者の意見に慎重に耳を傾ける謙虚さを身につけていることなどである⁸⁾。このことについて通じていると考えられる内容としてロジャース(K.Rogers)は「自己が、すべての経験を意識することを許すことのできるものとして見られる場合には、流動的で順応的な自己体制の基礎の上に自己統合と自信が発展する。」と主張する⁹⁾。自分が価値ある存在と認識することができる人間は全ての経験を受容・共感することができ、自己実現化へ向かう。言い換えれば他者から受容されることが自己受容への足がかりになるとも言えよう。

そして自己実現の人間とは、いわゆる「心理的自由」を確保し、対立や葛藤の中にあっても、自分自身の判断を下すことができるもので、いかなる環境においても、自分の感情や思考を偽ることなく自然で率直な態度を持ち合わせ、自己の持つ価値基準にしたがって行動できる人格のことを指している。このような「心理的自由」は人間の成長・発達、自己実現化へのプロセスにとって欠かせない重要な一要素なのである。

さて、子どもが児童期の発達課題を適切に履行しこのような自己実現への道(自己の可能性の最大限の発展・最善の自己の形成)へ一歩踏み出すためには、子どもの発達特性を理解し自己実現へのプロセスに配慮された教育的援助、指導が必要になってくると考えられる。子どもが望ましい発達をするためには学校生活を通してこれから生きていく上で必要な知識や技能の基礎を学び、自己実現に向けての準備として人間関係や道徳観、価値意識を習得することが大切なのである。そしてその過程において他者から受容され共感する体験を持つことによって果たされるものといえる。

自己実現の教育的課題

子どもの発達には発達段階の履行が必要不可欠なことは先にも述べたが、子どもたちをとりまく環境は危機的要因に満ちている。大人社会の価値観の混乱に巻き込まれ学校も家庭もその本来の目的を達成することができない。

中でも児童期の発達と教育の視点からみると学校のもつ意義・役割は非常に大きくこの時期の生活体験が子どもの知的、社会的、心理的発達の基礎に養うものである。以下いくつか重要と考えられる意義・役割を自己実現概念と関わりをもたせながら考察していきたい。

児童期の子どもはさまざまな行動状況の中、友達や仲間と関係を結ぶようになってくる。そして、その関係の中から自分と異なる他者の見方、考え方、感じ方、に気づき結果自分自身に対する自己認識が芽生えてくる。集団の生活の中におこる成功や失敗、第三者による評価などから理想的な自己と現実の自己との葛藤、対立や優越感・劣等感などの概念が形成されて、他者との比較や自己反省を踏まえて、自己を発見していく。

マズローは人間には本能的に本来無意識に人間的尊重を可能にする良い衝動の存在を認め、これを積極的に伸長するところに教育のあり方を求めている。自己に対する認識としての自己概念の形成は学校教育の場では重要であり、人間が自分自身の成長に向かう衝動が阻害されないよう配慮することで発達を促進することができる。積極的に学習に取り組むためにこの自己概念の形成が人格形成の上で重要な役割を果たすものであり学校は自己形成の場としての環境条件を整えることが教育の任務である。

また、学習の場としての学校の意義・役割は大きい。学校教育は、各教科、道徳、特別活動などの学習を通して子ども自身に、知識、技術、態度を教えると共に子ども自身の自己学習力の形成という役割をになっている。子どもたちは問題解決に向けて試行錯誤しながら学習をし学びを深めていく。学習する過程が将来自己実現へ結びつための基礎となるべきものであり、学びの主体は常に子どもそのものでなくてはならない。

「人間はいかにして賢明になり、成熟し、親切になり、よき嗜好をもち、工夫に富み、よい性格の持ち主となり、新しい環境に適應することができ、善なるものを知ること、学ぶのであろうか。すなわち外発的な学習というよりも内発的な学習を学ぶのであろうか。」¹⁰⁾学習は本来的なものであり、相対的なものであり、任意や偶然によるものではなく現実によって要求されたものである。マズローは従来の学習が、目的や価値を避けて、知識の習得のみに関心を持つ傾向を批判する。より積極的に正しい方向にむいた教育は、子どもの成長とその将来における自己実現を目指すものである。学校教育はこの

意味において学習の目標を見誤ることなく、学習の過程や教育の内容を内発的な興味に働きかけるものとし自己学習力の形成に注意深く配慮しながら行なわれるべきである。

さらに学校教育における集団行動、集団適応に目を向けてみると、集団による学習や活動を通して自主・実践的に人間の全人的教育を行ない人間として調和のとれた人格形成を達成する意味で集団活動は重要であると考えられる。しかしながら今まで学校教育の集団による教育や活動は集団行動への適応力に重きがおかれてきた。小学校学習指導要領には「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図るとともに、集団の一員としての自覚を高め、協力してよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる」とある。子供たちが常に集団の一員として帰属感をもち規律ある統一のとれた行動を、学級活動や学校行事などで学ぶことを期待しているのである。しかしながら、それゆえ集団と個を対置する考え方や実践力が欠如し「集団のなかにおいて個性を伸ばす」という個々の子供がもつ個性的な長所や能力が軽視されてきた。本来、集団は自立した個の連帯でなければならないはずである。集団の中の個を自覚しつつ、連帯感を深めていくことが重要なのである。

また、集団生活をとおして道徳的な判断力や実践力を身につけ集団生活における規則などを学習することは児童期の発達課題において重要な位置をしめている。しかしながら今日の学校社会は規則づくめであり、学校や教師が一方的に規則を押しつけ、学校生活の細部にわたるまで介入していたり、子供の学校外の交遊関係や余暇の過ごし方まで影響を与えていることが少なくない。そのため子供自身は管理され主体的・自立的な判断力や能動的な実践力が阻害されゆく傾向にある。集団への適応という観点から評価の対象になる場合が多く個として存在しにくくなってきているのである。集団の中で道徳性の発達を促進させるためには学校生活全体の集団に対する考え方を今一度振り返って再検討することが必要なのではないだろうか。そして、子どもによる価値の再発見と再創造性を援助するような指導方法の探求も課題とされなければならないのである。

マズローは人間の持つ社会感情こそが人類を互いに結びつけ、他人の喜びと自己の喜びとして感じ、他人の苦しみを自己の苦しみと感じる共同体意識を育ててきた

いと考えている。対人関係において自己実現をとげつつある人間は人格がよく統合され、葛藤の構造を持たないので深く心のこもった関係を結ぶことができる。学校生活の中で展開される集団の中での仲間との遊び体験は、仲間意識や約束、規則などの発達に欠かせない要素なのである。

このように考えると学校の意義・役割は「自己概念の形成」「自己学習力の形成」「対人関係における人格形成」の立場においてマズローは主張する教育の求める価値のあり方とコミットしており、子どもの人間的成長・発達を再検討するとき自己実現の視点を教育的に活用し指導することが学校教育に求められている課題と考えることができる。

それゆえ学校教育は、大人の（親や教師）暖かい保護と期待の中で様々な知識や技能を身につけていくことのできる環境を整え、学習のプロセスを重視し子どもが目標達成に向けて自ら学び取る力を育てていくこと大切なのである。

結びに

児童期は心身とも飛躍的に発達するパーソナリティ形成の大切な時期である。子どもが個性を十分に伸ばし望ましいパーソナリティ形成に向かうためには、やはり発達段階における発達課題を適切にこなすことが必要であり、今日の状況を理解にいたれた発達課題の履行・道徳性の発達、自己実現への志向とそのことへの適切な援助、指導の確立が今後検討されていかなければならないであろう。

さて、第15期中央教育審議会はその第一次答申としてこれからの学校教育のあり方として「ゆとり」の中で子どもたちに「生きる力」をはぐくんでいくことを基本と考えた。そして「生きる力」について「我々はこれからの子どもたちに必要となるのは、いかに社会が変化しようとして自分と課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自ら律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性であると考えた。たくましく生きるための健康や体力が不可欠であることは言うまでもない。我々は、こうした資質や能力を、変化の激しいこれからの社会を「生きる力」と称する……(以下略)」と述べている。ここで注目すべき点は生きる力は変化の激しい社会を見据えていることにあ

る。

社会の変化に主体的に対応できる意志・態度・能力・及び思考力・判断力は学びの原動力となりえるものである。マズローによれば、行動の根元となる欲求は生理的欲求を始め、安全の欲求、所属と愛の欲求、承認の欲求および自己実現の欲求といった、5つの階層を構成すると述べている。自己実現を志向するためには生理的な次元や安全と所属や愛についての欲求が充足されなければならない。そして「自己実現をしている人々は、既に基本的欲求を十分に満たしている」と強調する^{11), 12)}。すなわち変化の激しい社会においては独自性やひとりひとりの子どもが自分らしさを十分に発揮する能力を身につけ、その基本的欲求が満たされているならば、子どもが自ら学習への意欲を取り戻し、自己実現へのプロセスを歩み始めるのである。

こうした視点から新しい学習や教授方法が確立され、実践されることにより、子どもたちが共に生きることへの現実的対応の力を養い、問題は解決の方向に向かうことを期待するものなのである。

註

- 1) 「日本子ども資料年鑑2002」
日本子ども家庭総合研究所編KTC中央出版 p.32
- 2) R. J. Havighurst ; Human development and education, Longmans, green & C, INC. New York, 1953
R. J. Havighurst 「人間の発達課題と教育」 荘司雅子監訳 玉川大学出版部 1995 pp.47-52
- 3) 堀尾輝久 「子ども白書2002」 草土文化 p.14
- 4) J. Piaget 「ピアジェの児童心理学」 波多野完治訳 国土社 1966 p.44
- 5) Kohlberg, L ; Handbook of socialization : Theory and research, Chigago, Rand McNaiiy, 1969 pp.347-480
- 6) E. H. Erikson 「ライフサイクル その完結」 村瀬孝雄・近藤邦夫役 みすず書房 p.34 1989
- 7) 「自己実現の心理」 上田吉一著 誠心書房 1976 p.22
- 8) 「自己実現の心理」 上田吉一著 誠心書房 1976 pp.183-186
- 9) C. R. Rogers 「ロジャーズ全集 8巻」 伊藤博訳 岩崎学術出版社 1974 p.45

- 10) Maslow. A. H ; Some educational implications of the humanistic psychologies, Harvard Educational Review, 1968
Maslow. A. H 「人間性の心理学」 小口忠彦訳 産能大学出版社 1987 pp.433-434
- 11) Maslow. A. H ; Motivation and Personality, Third Edition, Harper & Row, New York, 1970
Maslow. A. H 「人間性の心理学」 小口忠彦訳 産能大学出版社 1987 pp.56-72
- 12) Maslow. A. H ; The Farther Reaches of Human Nature, The Viking Press, New York, 1971
Maslow. A. H 「人間性の心理学」 小口忠彦訳 産能大学出版社 1987 p.73

参考文献

- 1 「コールバーグ理論の基底」 佐野安仁・吉田謙二編 世界思想社 1993
- 2 「道徳性の発達と教育—コールバーグ理論の展開—」 永野重史編 新陽社 1975
- 3 「道徳的判断力をどう高めるか」 櫻井育夫著 北大路書房 1997
- 4 「育てはぐくむかわる」 倉戸ツギオ編著 北大路書房 1997
- 5 「幼児期と社会Ⅰ」 仁科弥生訳 みすず書房 1977
- 6 「幼児期と社会Ⅱ」 仁科弥生訳 みすず書房 1980
- 7 「ロジャーズ選集上・下」 伊藤博・村山正治訳 2001
- 8 「発達心理学—幼児・児童・青年の発達と教育—」 勝井晃編著 八千代出版 1988
- 9 「エリクソンは語る」 R. I. エヴァンズ 岡堂哲雄・中國正美訳 新陽社 1981
- 10 Maslow. A. H 「人間性の心理学」 小口忠彦訳 産能大学出版社 1987
- 11 「自己実現の心理」 上田吉一著 誠心書房 1976

Abstract

As the contemporary world is getting more and more chaotic, our traditional values have changed into multipolarized new values, and it seems to difficult to achieve developmental tasks which is necessary for desired human development. The aim of the present paper is to solve the problems of the contemporary world by reviewing children's developmental characteristics as well as discussing what the school education for self-actualization should be.